

北大工学部 山口 晴幸
北大工学部 北郷 駿
北大工学部 三田地 利之

はえがき 粘性土の非排水せん断特性(特に、ダイレイタンシー挙動)はせん断時の時間効果より、圧密時の時間効果を顕著に受けることを報告して来た。本文は、等方圧密した粘性土について、平均有効主応力一定排水せん断試験、側圧一定排水せん断試験を実施し、排水せん断中の体積変化(ΔV_c)が圧密成分(ΔV_{c0})と偏差応力成分(ΔV_{cd})との和で表わされることを確認し、さらに、このかね合せが二次圧密中の粘性土の排水せん断中にあっても成立つか否かを検討したものである。

実験 試料は練返し再圧密粘性土であり、その物理的性質はCL.

95%, PI. 64%, Gs 2.61, 粘土分(<2μm) 27% である。圧密は back pressure 98(kPa)のもとでの等方圧密で、所定の圧密圧(=196kPa)まで段階的に拘束圧を増す方法を取った。一次圧密領域と二次圧密領域との境界を便宜上、所定の拘束圧に達してから2800分経過した時をとし、それ以後の静置期間を二次圧密期間とし T_s (min) で表わす。なお、一次圧密終了時では実質的に過剰間隙水圧が消散しており、圧密度は99%以上に達している。

(i) 等方圧密膨張試験 表-1に示すように、所定の圧密圧($P_c = 196$ kPa)で一次圧密終了後、さらに、13000分、38000分、52000分静置した後、24hr間隔で拘束圧を20kPaごとに増し、再び圧密を行ない、24hr経過の後、20kPaごとに拘束圧を下げ膨張させる。なお、 $T_s = 0$ の供試体についての $e - \ln P$ 曲線を正規圧密線(N.C.L.)とする。

(ii) 平均有効主応力一定排水せん断試験(P-Test) 一次圧密終了後、直ちに応力制御で有効応力比増分($\Delta \eta = \Delta \gamma = 0.075$)およびその載荷期間(24hr)を一定にして排水せん断する。

(iii) 側圧一定排水せん断試験(ND-Test, DD-Test) 二次圧密中にあらず供試体について、ひずみ制御で排水せん断する。なお、 $T_s = 0$, $T_s \neq 0$ の場合をも含めてND-TestとDD-Testとして区別して表-2に示している。せん断中の排水量はナリインジケータ、コントロールシリンダ、モータから成る体積変化測定装置を参考し、自動的かつ連続的に測定した。図-1は配管図を示している。全ルートは脱気水で満し、せん断中排水される水は供試体上部キャップを通して、①に入り、そこから水銀ヘッド(A)と(B)にわざわざ3ンバランスを生じ、ここの(B)の位置の光電スイッチが感知し、モータが作動し、シリンダ内ヒストンロッドが右側に移動する。ここで、水はシリンダ左室に誘導され、再び水銀ヘッドがつり合った状態となり、モータが停止する。この一連の動作が連続的に繰り返される。供試体への吸水の際には、ここの動作が起きた。なお、排水量はピストンロッドの移動量(100mm ダイヤルゲージ)とシリンダの断面積(6.15cm²)から計算され、100ccまで測定可能である。

[実験結果と考察] $\gamma = \sigma_1' - \sigma_3'$, $P = (\sigma_1' + 2\sigma_3')/3$, P_c = せん断開始時の平均有効主応力, ϵ_c = せん断開始時の間隙比, $\Delta \epsilon_c$ = せん断開始時の供試体の体積, $(\Delta V_c)^0$ = 全体積ひずみ, $(\Delta V_c)_d$ = P-Testによる体積ひずみ(ダイレイタンシー), $(\Delta V_c)_c$ = 平均有効主応力増分による体積ひずみ, $(\Delta V_c)^* = (\Delta V_c) - (\Delta V_c)_c$, P_e = 等価圧密圧, Δe_c = 全間隙比の変化量, $\Delta \epsilon_c$ = 平均

	P_c (kPa)	T_s (min)
P-Test	194	0
ND-Test	193	13000
DD-Test	195	38000
DD-Test	193	52000

Test Type	No	P_c (kPa)	T_s (min)	$\dot{\epsilon}(\% / min)$
P-Test	30	194	0	$\Delta \gamma = 0.075$
ND-Test	47	193	0	0.0000742
DD-Test	50	195	22000	0.0000762
DD-Test	48	193	56000	0.0000755

表-2

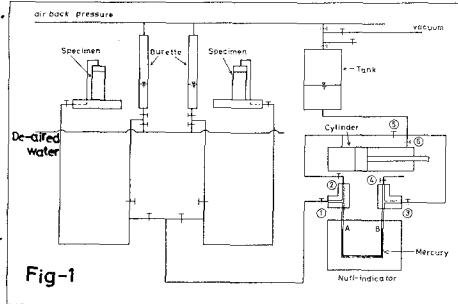


Fig-1

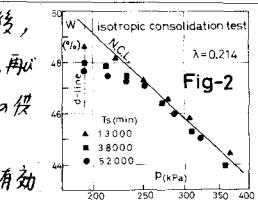


Fig-2

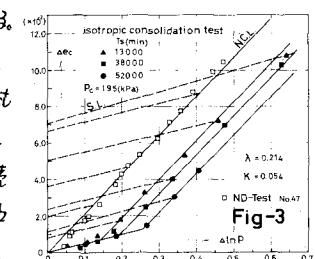


Fig-3

有効主応力増分による間隙比の変化量、 $(\Delta e_d)_{cr} = \text{critical state}^{\alpha} \sigma_e - \Delta e_c$, $\epsilon_i = \text{軸ひずみ}$, $\epsilon_s = \epsilon_i - \frac{1}{3}(\Delta e_d)$ とする。図-2,3は二次圧密中の供試体についての等方圧密膨張試験結果を示すが、含水比(w)、間隙比の変化量(Δe)を示している。圧密試験開始時にあたっては状態曲面下のd-line上に位置するが、圧密圧(P)の増加に伴い、再圧密線(膨張曲線)上をたどり、正規圧密線(N.C.L.)に達し、こうしてN.C.L.上に沿って圧密が進行する。二次圧密期間が長いほど膨張先行圧密圧力が増大し、N.C.L.(勾配 $\lambda = C_2/2.3 = 0.214$)に達するまでの P の値が大きくなる。なお、図-3の破線は膨張線(S.L.)を示しており、 λ の勾配 k の値($k = 0.054$)は二次圧密期間によって変わらずほぼ一定である。

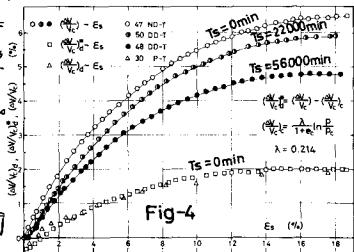


Fig-4

図-4,5は排水せん断試験結果を示す。まず、正規圧密供試体において、 $(\Delta e_d)_c = (\Delta e_d)_c + (\Delta e_d)_d - (1)$ の関係が成立することを確認する。 $T_s=0$ の場合の圧密試験結果より、 $(\Delta e_d)_c$ と P との関係は $(\Delta e_d)_c = \frac{1}{1+\epsilon_c} \ln \frac{P}{P_c} - (2)$, $\lambda = 2$, $(\Delta e_d)_d$ と $(\Delta e_d)_d$ と ϵ_s との関係で示したのが図中の口印 Δ 印 \square であり、(1)式の関係が成立し、図-6のPで正規化した状態経路も一致する。つまり、図-3の口印で示すように、排水せん断中の平均有効主応力増分による Δe は P の増加に伴い、(2)式のN.C.L.上に沿って増加する。次に排水せん断特性によれば $abing$ 効果について検討する。図-4,5に示すように、 T_s が大きくなるにつれて、同一の ϵ_s における Δe の体積ひずみ($\Delta V/V_c$)は低下する。図-7は排水せん断中の状態経路を $\Delta e - \ln P$ 上にプロットしたものである。 $abing$ 効果を受けると、ND-Testの状態経路に達するまで、体積ひずみ(Δe_d)がゼロでせん断が進行し、その後ND-Testと同一の経路をたどりcritical stateに達するようになる。図-9は圧密試験結果を示すが、排水せん断中の状態経路を模式的に $e - \ln P$ 面上に示したものである。a点にみる排水せん断経路はadeh, abingによりb点にみる場合はbdehとなる。また、平均有効主応力の増加に伴う Δe_c はND-Testでは $\alpha \ln \frac{P}{P_c}$, DD-Testでは $\beta \ln \frac{P}{P_c}$, $\alpha < \beta$; $\Delta e_c = k \ln \frac{P}{P_c}$, $\beta < P_c / P_f$; $\Delta e_c = \lambda \ln \frac{P}{P_c}$ となる。 $\lambda < 2$, $P_c < P_f$ の Δe_d^{*} はND-TestとDD-Testで等しくなる。図-8はcritical stateでの $(\Delta e_d)_{cr}$ の値を示すと、 T_s によりずつほぼ一定の値である。しかし、 P_c / P_f では $abing$ 効果を受けると、 Δe_d は負の値を取る。一方、b点にある供試体についてP-Testを実施したとすると、critical stateでの Δe はレタクシニー量は $(\Delta e_d)_{cr}$ となり、DD-Testから $(\Delta e_d)_{cr}$ とは異なることになる。 $\lambda < 2$ 、 $abing$ 効果を受けると、 Δe の経路により、 Δe はレタクシニー特性は異なることになる。図-10,11は体積ひずみ($\Delta V/V_c$) d と Δe_d 、 ϵ_s との関係を示している。なお、 $(\Delta e_d)^* = (\Delta e_d) - (\Delta e_c)$, $P_c < P_f$ の Δe_d^{*} は $\frac{1}{1+\epsilon_c} \ln \frac{P}{P_c}$, $(\Delta e_d)^* = (\Delta e_d) - \frac{1}{1+\epsilon_c} \ln \frac{P}{P_c}$ より計算した。体積ひずみと間隙比変化量との関係は $(\Delta e_d)^* = \frac{\Delta e_d}{1+\epsilon_c}$ である。 $\lambda < 2$, T_s が大きいほど Δe_d が小さくなり、 $P_c < P_f$ では $(\Delta e_d)^*$ は大きな値となる。

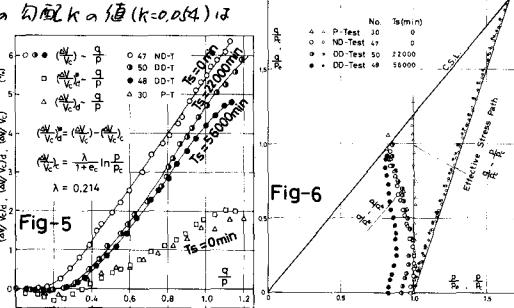


Fig-5

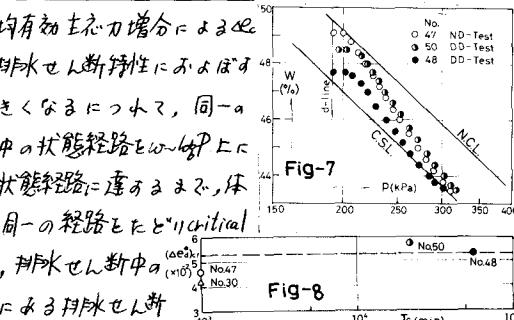


Fig-6

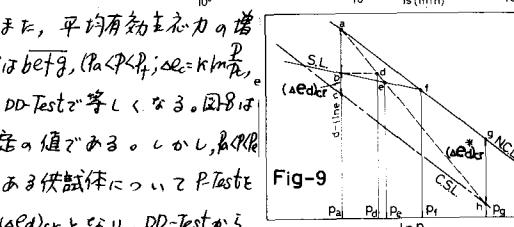


Fig-7



Fig-8

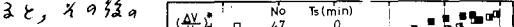


Fig-9

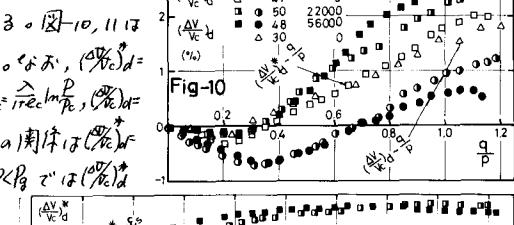


Fig-10

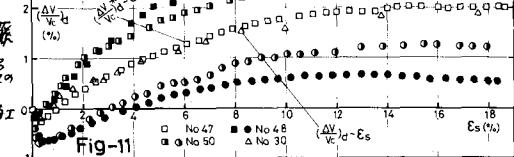


Fig-11

(あとがき) 本報告の実験およびデータ整理に当り、本学大学院生佐藤亮、本学学生福田雅司、中西由一諸君、井上國作成にあたり工農農業局の方々に協力を受けた、ここに記して深甚なる謝意を表す。(参考文献) 1979, 1980, 土木学会論文集(第179号), 1979, 1980, 土木学会論文集(第180号), 1979, 1980, 土木学会論文集(第181号), 1979, 1980,